

クローズアップ インタビュー



瑞宝双光章受章者 **杉浦 幹雄氏** (74歳)

- 主な経歴**
- 昭和32年9月～昭和38年3月
愛知県碧海郡高浜町立高取小学校
 - 昭和61年4月～昭和62年3月
愛知県教育委員会 社会教育部 社会教育課主査
 - 平成元年4月～平成3年3月
愛知教育大学教育学部附属養護学校 副校長
 - 平成3年4月～平成5年3月
愛知県高浜市立南中学校 校長
 - 平成5年4月～平成11年3月
愛知県高浜市教育委員会 教育長

平成20年春の叙勲の発表があり、高浜市内から杉浦幹雄さん(二池町二丁目在住)が「瑞宝双光章」を受章されました。

40年以上の間教育に携わり、教育の現場に身を置いて児童・生徒の指導に努めた後、教育委員会の教育長として障がい児の教育環境の向上に精力を注ぎました。

杉浦さんのインタビューを紹介します。

受章の感想

教育委員会から「春の叙勲の受章が決まりました。」と伝えられた時は、まさか、私が受章者になるとは思ってもいませんでしたので、とても驚きました。身に余る光栄で、非常に嬉しく思います。

5月12日、国立劇場での叙勲勲章の伝達式。その後、皇居「春秋の間」においての拝謁は、直接天皇のお言葉・お姿に接し極度の緊張と感動を覚えました。すべてが、良い思い出となりました。

教員の仕事

私が教員の仕事を長く続けたのは、子どもたちの支えもさることながら、保護者・地域の方々の支援があったればこそです。

子どもたちの純真さには心を打たれ、彼らの交遊する姿は、大人社会にも通じ、いわば「人間学」とも言つべきものを学ぶことができました。

また、教員としての経験を積み重ねる中で「授業」という言葉に疑問を持つようになり、学校は、児童・生徒が学習する場であり、主役は彼らなのです。

児童・生徒が、先に見据える未来を豊かに生きていくための基礎を学ぶものだと思えるようになり、彼らが主体となつて学習に取り組むことを進めてきました。

そんな中、ややもすると勉強に興味を示さなかった児童・生徒が自分なりに学習に取り組む姿が見られるようになり、私の想いを理解してくれたのだと実感できるようになりました。教師冥利に尽きる想いでした。

苦勞したこと

教員生活の後半は、異動が多く知識・技術の習得もさることながら、即座に対応しなければならぬことが非常に多く苦勞しました。

しかし、先輩諸氏の指導を受け誠心誠意一つ一つの仕事に全力を投じ取り組んできました。様々な職場経験が、私の人間としての礎となりました。

嬉しかったこと

かつての教え子たちが、今でも私を友人として交際してくれたり、クラス会の出席を準会員のような立場として声をかけてくれることが、とても嬉しいことです。

先日受章の知らせを聞いて、吾がごとのように喜んでくれました。

これからの生活

最近は、日ごとに心身の衰えを感じ、散歩・ウォーキングを心がけ、旅先でも自然の多い場所を気持ち良く歩いています。退職後にパソコン操作を覚え、メール交換やインターネットで様々な情報を得たり、趣味の囲碁対局を楽しむ傍ら、自身の人生を振り返りながら、こつこつと自分史を綴っています。

これまでの私は、敬愛する夏目漱石の言葉「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」という「草枕」の一節を戒めと心に刻み仕事をしてきましたが、今後は『則天去私』という漱石が晩年に残した言葉を胸に、自然体で心身ともに健康であることを心がけながら、関わってくださった皆様に感謝し、人に迷惑をかけることなく自分なりの生活を楽しんでいきたいと思っています。

ありがとうございました。